



学術メディアセンター (AMC) 完成予想図

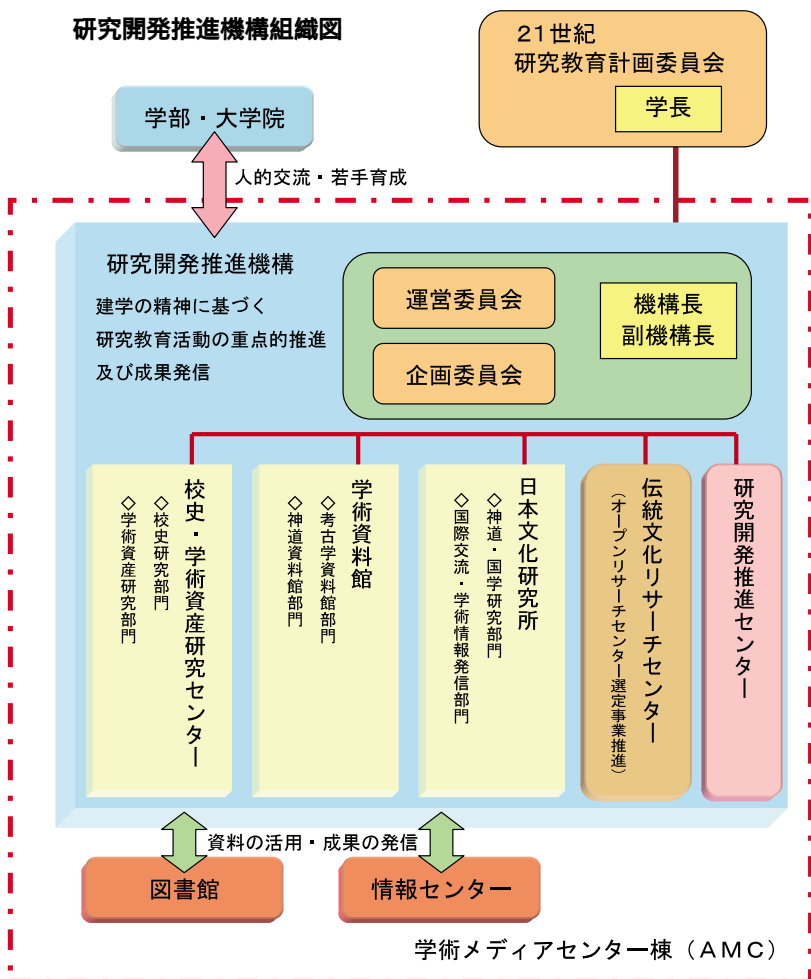
研究開発推進機構、発足

國學院大學
研究開発推進機構
機構ニュース

Vol. 1 No. 1
 発行人 阪本 是丸
 編集人 松本 久史
 〒150-8440 東京都渋谷区東
 4丁目10番28号
 電話 (03) 5466-0162
 FAX (03) 5466-9237

学術資料館	日本文化研究所	研究開発推進機構の発足にあたって	機構組織図	完成予想図	学術メディアセンター (AMC)
吉田 恵一	井上 順孝	阪本 是丸	1	1	1
5	3	2			

彙報	人事・組織	伝統文化リサーチセンター	研究開発推進センター	校史・学術資産研究センター	校史・学術資産研究センター
12	10	9	8	6	6
		杉山 林継	加瀬 直弥	藤田 大誠	



研究開発推進機構の発足にあたって

研究開発推進機構長 阪本 是 丸

國學院大學は、創立百二十周年を迎えた平成十四(二〇〇二)年を契機に、先学による研究教育活動の実績を基盤に国際社会の発展に貢献するため、建学の精神に基づく研究教育計画『國學院大學二十一世紀研究開発推進機構発足』を策定した。今般の研究開発推進機構発足は、この計画の五年間の集大成であると同時に、今後の発展のための新たな一歩として位置づけられるものである。

そもそも本学は、設立母体の皇典講究所開設以来、日本の文化的基層である神道を建学の精神に置き、総合的文化学である国学的研究教育手法によって、神道・日本文化に関する研究教育活動を実践してきた。本機構の前身である日本文化研究所の昭和三十(一九五五)年の設置もこの活動の一環であり、時の石川岩吉理事長兼学長らの、終戦時以来混乱し続けた神道・日本文化研究の前途に対する危惧がその契機であることは、設置の経緯を紐解けば明らかである。本機構の設置は、この本学の根幹かつ特色ともいふべき精神と、それに基づく世界的レベルの研究成果を継承し、将来の研究教育の基軸を

担うための措置である。すなわち本機構が目指すところは、単なる大学の個性化ではない。多様な価値観を持つ人々同士が、時として対立・軋轢を生む現代において、神道・日本文化の特性を世界に示すことにより、新たな協調・共生のあり方を提言すること。それが、本機構に課せられた学問的使命であると確信している。本機構の設立に当たっては、これまで本学における高度な共同研究とその成果の国際的情報発信を牽引してきた日本文化研究所や、十万点を超える特色ある専門コレクションを有する考古学資料館・神道資料館などを統合再編した。その結果本機構は、共同研究推進の中核となる研究開発推進センターと、共同利用研究機関である日本文化研究所、学術資料館、校史・学術資産研究センターによって構成されることとなった。

この本学建学以来の一大研究組織改編策により、マンパワーの集中と中長期的な研究ビジョンの構築・実現、研究成果の効果的な公開・発信を行い、大学全体の研究・教育能力向上を目指すための組織固めがなされたのである。各機関の概略については

各機関長等から紹介するものとして、ここでは当面本機構一丸となって取り組むべき課題を提起しておきたい。

まずは、平成十四年度以来実施してきた文部科学省二十一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」事業を継承・発展するための、神道・日本文化に関する国学的研究・教育拠点の発展である。当該プログラムによって、神道を中心とした日本文化の独自性と普遍性を解明するための資料収集および基礎的分析が図られ、改訂英訳版『神道事典』(Encyclopedia of Shinto)をはじめとする、当該分野の研究を行うに当たり必要不可欠な情報発信を世界レベルで行うことができた。当該プログラムは『二十一世紀研究教育計画』の具体的事業のひとつとして位置づけられており、かつ本機構の設立がプログラムの目標でもあったため、拠点の発展は全機構的重点課題といえるのである。すでに、研究開発推進センター及び各研究機関が、それぞれの設置趣旨に対応しつつ、その成果を活かした形で世界的水準の神道・日本文化の研究成果の積極的な発信を継続する計画を打ち出しており、今後はその着実な実行を行うことが、最も重要な任務となる。

次に、文部科学省選定の私立大学高度化推進事業の推進である。建学の

の精神に基づく研究教育計画のさらなる展開と、平成二十年度供用開始予定の学術メディアセンター(AMC)棟における研究成果の公開を促進することを目的に策定した研究事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」が、この四月に文部科学省オープン・リサーチ・センター事業に選定された。この事業は、日本の伝統文化が育んだ知恵と実践の社会的意義を、様々な「資料」(モノ)からその背景にある「心」を抽出することで明らかにすることを目的とする。

当該事業の推進のため、本機構に推進組織「伝統文化リサーチセンター」を設置し、(一)祭祀遺跡、(二)神社祭礼、(三)國學院の学術資産、という三種の「モノ」から「心」を究める組織を形成する。同センターには本機構の専任・兼任教員はもとより、中堅・若手の研究員、さらには外部研究者をも構成員として招聘することで、開かれた研究環境での活発な研究を目指している。間近に迫ったAMC棟の本格的運用を行うための種々の準備をこなしつつ、研究の基礎を確立することは容易ではないが、機構の代表的事業として鋭意推進を図る予定である。

最後に提示すべき課題は若手研究者の育成である。二十一世紀研究教育計画の策定以降、前身の日本文化研究所では任期制専任講師・助手を

採用し、神道・日本文化研究を行う若手研究者のキャリアパス形成を積極的に支援した。平成十七年度の研究開発推進センター発足により若手育成策は一層の充実がなされ、現在の機構の専任スタッフ組織のもととなった。本機構はこれまで任用された若手研究者のさらなる活躍の場を提供し、独創的かつ自発的に社会還元を行う研究者としての自覚を与えるため、機構の企画運営に深く携わることのできるよう人材配置を行った。今後これら若手の研究者が成功することを期待して止まない。

以上の課題はそれぞれ簡単に克服しえるものではなく、さらにこれまでに実施してきた諸事業を継続発展させる必要性に迫られている。いずれも全学的かつ長期的視野に立ったシステム構築と、不断の研究教育活動の促進が求められるものである。し

日本文化研究所

日本文化研究所長 井上順孝

日本文化研究所は研究開発推進機構の発足にともない、活動内容が大幅に変わることとなった。従来の規程は平成十八年度末をもってすべて廃止となり、十九年度からは、細かな内規等を別にして、基本的に機構

の規程が適用されることとなった。専任制度が廃止され、業務委員会もなくなった。またプロジェクトも校史・学術資産研究センターに移動したものが、全体的に縮小されている。本年度は以下のような構成と

なっている。また十九年度中に調整をおこなうため、総合プロジェクト以外は二十年度以降大幅に組み替えられる予定となっている。

総合プロジェクト

「近世国学者の靈魂観をめぐる思想と行動の研究」

責任者 松本久史

専任教員 遠藤 潤

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

責任者 井上順孝

分担者

専任教員 平藤喜久子、遠藤 潤、星野靖二

兼任教員 石井研士、小川直之、千々と到、黒崎浩行

ノルマン・ヘイヴンズ

市川 収、市田雅崇、大澤広嗣、堀越祐一

研究補助員 ジョリオン・トーマス、

ジョシユア・イリザリ、

エリック・シッケタンツ

共同研究員 江島尚俊、住家正芳、

武井順介、山内利秋、

山田美紀子、

ジェームズ・メーガ、

ライアン・ワルド

専任プロジェクト

「日本神話の神話学的研究」

責任者 平藤喜久子

共同研究員 ジャン・ミッシェル・

ピユテル、アルノー・

プロトンス

兼任プロジェクト

「万葉集における神事語彙の基礎的研究」

責任者 辰巳正明

「現代日本の情報環境における健康とメディア文化」

責任者 野村一夫

「詩人大使 ポール・クロードルの総合的研究」

「国際文化交流」と日仏関係史」

責任者 濱口 學

それぞれについて簡単に説明を加える。二つの総合プロジェクトは日本文化研究所の次の二つの恒常的研究部門に対応して設置されたものである。

(1) 神道・国学研究部門

(2) 国際交流・学術情報発信部門

まず「近世国学者の靈魂観をめぐる思想と行動の研究」は、本年度より新しく発足したプロジェクトであるので、本年度中にさまざまな準備をして、次年度以降さらに充実した研究態勢を構築していくことになる。松本久史講師、遠藤潤助教ともこれまで国学者についての研究を重ねてきているので、重厚な研究成果が期待される。

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」は、二十一世紀COEプログラムの第三グループによる研究の拠点となった「神道・日本文化のオンライン情報発信の総合研究」を発展

させたものである。COEプログラム実施中は、プログラムによる事業の成果の発信作業を支えたが、今後はCOEプログラムによって形成された拠点である研究開発推進機構の研究成果を発信していくことを一つの大きな責務として担っている。

デジタル・ミュージアム構想は、本学の学術資産及び研究成果を総合的に発信し、学内の教育・研究に役立つだけでなく、学外さらには国外の研究者にも利用可能なものとするというものである。大学という研究機関の社会貢献という点も意識している。そこで、日本文化研究所の総合プロジェクトとしての活動に加えて、機構のすべての部署の情報発信について企画調整の機能をもたせることを目指している。そのため、委員会を設け、教員のみならず、情報システム課及び図書館の事務担当者も会議に加わってもらっている。機構のホームページの管理と、データベースの統合的構築、さらに国外へ発信する際の翻訳等の作業を管轄することになる。なお、井上順孝と千々和到教授を代表とする研究が、それぞれ科学研究費補助金の新規採択となり、そこにおける研究との関係をもたせながら、プロジェクトにも関わる。

本年度は「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトのな

かに、かつての学術フロンティアによって実施されてきた事業の後継となるような研究が含まれている。小川直之教授がその実質的責任者となっている。本年度オープン・リサーチ・センターが採択になり、伝統文化リサーチセンターが新たに設置となった。そこにおける研究との関係は折口博士記念古代研究所の活動との関係を調整しつつ、次年度からどのような研究に展開させていくかを本年度中に具体的に定めていくことになっている。

専任プロジェクトは昨年から実施されている「日本神話の神話学的研究」である。このテーマに関係した平藤喜久子講師を代表とする科学研究費補助金費が継続採択となっており、そこと関連づけて研究が実施される。

兼任プロジェクトはいずれも十九年度でまとめにはいるプロジェクトである。このうち、「万葉集における神事語彙の基礎的研究」プロジェクトは、その研究成果を書籍もしくはウェブ上で公開する予定のもとに研究を進めている。

日本文化研究所の研究を掲載してきた『國學院大學日本文化研究所紀要』は十九年度に第百輯を刊行し、これによって日本文化研究所として

の紀要は終了となる。ちょうど百号となるので、それらをすべてデジタル化し、DVDとして刊行し、さらに将来的にはウェブ上で公開することを目指している。すでに九十九号までの全内容のPDF化が終了し、透明テキストファイルによって検索も可能な状態になっている。百号の刊行をもって、デジタル化作業も完成になる予定である。

また日本文化研究所設立五十周年記念事業として、この紀要のDVD化と刊行の他、すでに平成十九年一月に開催された記念公開講演会(坂村健、吉田憲司両氏が演者)と記念国際シンポジウムが終了している。もう一つ、記念誌の刊行が計画されており、これが本年度中に完了の予定である。ちょうど五十年の節目のときに、日本文化研究所は大きな転換点を迎えたわけである。今後は研究を特化した形でプロジェクトを実施することになるが、すでに述べたように、インターネットによる情報発信の面では、研究開発推進機構の成果を総合的にまとめいく役割を担っている。

これまでの日本文化研究所のホームページのコンテンツは学内の研究部署のうちでも、もっとも充実したものであり、かつもっとも早期に体系的に作り上げられたものである。これは本格的な情報時代の到来を見

越して、すでに一九九〇年代から長期的なプランのもとに、とくに国際的な発信を重視して行われてきたものである。このような態勢があったからこそ、二十一世紀COEプログラムにおいても、他の人文系のプログラムに決してひけをとらないデジタル情報の発信が可能になったのである。実際にデータベース作成などに関われはすく分かることであるが、こうした作業は地味であるが、注意深いチェックが必要であり、また時代に対応したシステムを導入するという柔軟な態度が求められる。

人文系の研究では、コンピュータやインターネットの利用が、他の分野に比べて遅れていることもあって、ともすれば、こうした作業を軽視する傾向にあったことは否めない。しかし、国会図書館をはじめ、公的機関でのデジタル化、オンラインでの情報提供が一般化しているとき、学術資産や研究成果をインターネットを用いて広く学内外に発信するという作業は、もっとも優先すべき作業の一つになってきている。

この面で優れたインフラを有する日本文化研究所が、今後もその機能を維持・発展させられるようにしていきたいと考えている。そのためには、すぐれたコンテンツはできるだけ早く学内の教育や、広く国内外の研究者に公開していけるようにすべ

きである。

さらにまた、こうした情報発信は、研究者のネットワークを形成する上で役立てていかなければならない。COEの国際シンポジウムでつくづく感じたことは、日本の神道研究者が国際的動向に比較的無関心であるということと、国外の研究者の神道に対する関心が強まっていることとアンバランスである。しかし若い世代の研究者の中には、COEプログラム実施期間中に開催された各種の国際シンポジウムを通して、国際的な研究状況に目を向けなければ、閉塞した研究に陥りやすくなるということを認識した人が増えたように感じられる。これは非常に大事なことであると考える。

神道は誤解されているとか、日本文化が正しく伝わっていないというような言い方が、ときおり見出される。国際的には靖国問題などによって、神道のある面だけが突出して伝えられているということは、これま

た国際シンポジウムによって痛感されたことである。そうした事態が、

自分たちが考えていることを国際的に相手に伝えるような方法で伝えようとする努力の乏しさの結果であるということもまた深く認識すべきであろう。これに関しては、昨年度よりスタートした、神道関連の重要な論文を双方向で翻訳するという試みが、ささやかながら、事態の改善につながることを期待している。これは日本語の論文を英語その他の言語に、また国外の論文を日本語に翻訳するというプロジェクトで、昨年度四本が翻訳され、本年度少なくとも五本を翻訳する計画である。

神道・国学研究部門で実施されるプロジェクトの成果も、できるだけ国外に発信し、国外の研究者が参照できるようにしたいと考えている。二つの研究部門が有機的に関連することで、日本文化研究所におけるプロジェクトを特化したことの意義が了解されることになるのではなからうか。

学術資料館

研究開発推進機構の設置に伴い、従来の考古学資料館と神道資料館を統合した学術資料館が創設された。

学術資料館長 吉田 恵 二

これは考古学資料館・神道資料館がこれまでに行なってきた研究・教育・普及活動を引継ぎながらも、さ

らに時代の様々な要請に応えた新たな活動を展開することを目的とする。

当面する最大の課題は平成二十年秋開設予定の展示室の展示計画の策定と実施であり、四月から考古学資料館と神道資料館のスタッフによる学術資料館会議を開催して、問題点の整理と今後の方針の検討を始めていく。ここでの最大の問題はこれまで個々別々に運営・展示されてきた考古学資料館と神道資料館を有機的に結びつけた國學院大學独自の総合博物館的なものにするところである。それぞれに長い歴史を持つことから、

考古学資料館・神道資料館の名称は残すものの、國學院大學の顔として社会から高い評価を得る内容にしたいと思っている。さらに、同じフロアーには校史の展示コーナーも設けられることになっており、文字通り大学全体として取り組むべきプロジェクトである。

以上が学術資料館創設の経緯と今後の主たる目的であるが、考古学資料館部門・神道資料館部門それぞれが行う事業内容およびそれに基づく今年度の主な事業計画は以下のとおりである。

1、各部門が行う事業
考古学資料館部門

(1) 考古学に関係する資料の収集、整理、保存、閲覧、貸借、交換及び展示

(2) 前号に関する調査、研究及び開発

(3) 資料の目録並びに図録、資料集、年報、調査報告書、研究報告書、紀要、ミュージアムグッズ等の作成、頒布及び開発

(4) 資料に関する解説並びに講習会、研究会、講演会及び映画会等の実施

(5) 本学に設置される考古学・博物館学等科目への協力

(6) 生涯学習機関、学外の教育、学術又は文化に関する諸機関との連携・協力

(7) その他必要と認められる事業
神道資料館部門

(1) 神道に関係する資料の収集、整理、保存、閲覧、貸借、交換及び展示

(2) 前号に関する調査、研究及び開発

(3) 資料の目録並びに図録、資料集、年報、調査報告書、研究報告書、紀要、ミュージアムグッズ等の作成、頒布及び開発

(4) 資料に関する解説並びに講習会、研究会、講演会及び映画会等の実施

(5) 本学に設置される考古学・博物館学等科目への協力

(6) 生涯学習機関、学外の教育、学術又は文化に関する諸機関との連携・協力

- (7) その他必要と認められる事業
- 2、各部門の今年度の事業計画
- 考古学資料館部門

(1) 収蔵資料の整理

平成二十年以降AMC棟での展示に関わる収蔵品の整理作業および展示コンテンツ・展示品の解説文作成に関する情報の収集、整理、入力。

(2) 学術発掘調査

考古学資料館が独自に行なってきた祭祀遺跡の発掘・研究の継続事業で、平安時代の祭祀遺跡である山形県庄内町須部野(皇野・すべの)A遺跡を発掘する。当遺跡に関しては昨年度に予備調査として、遺跡内のみならず池の地中探査と周辺の歴史的環境の調査を行なっており、調査成果は報告書として公刊する。

(3) 印刷・出版

①考古学資料館紀要第二十四輯の出版

②考古学資料館要覧(吉谷氏旧蔵資料)の出版

③服部和彦氏寄贈資料図録Ⅱの出版

神道資料館部門

(1) 展示資料の修復・複製
平成二十年秋の学術資料館開館に関わる所蔵品の修復およびレプリカの作成。

(2) 神道資料の調査・研究・収集
祭礼絵図・屏風など大型資料の撮影。大神神社等所蔵祭礼器具の調査

(3) 印刷・出版

- ①神道資料館報八号の出版
- ②学術資料館開館記念所蔵品図録の出版

以上の事業のほか、継続事業として今年度も「雑穀文化と日本の基層信仰」と題する研究プロジェクトを、中国山東大学樂豊実教授を共同研究員として実施する。また、文部科学省の採択を受けて今年度から新しく発足するオープン・リサーチ・センター構想に基づく事業が始まる。「モノと心(3) 國學院の学術資産に見るモノと心」という三つのプロジェクトのうち、学術資料館では教員・学生を中心に(1)と(2)の調査・研究を開始する。その一部は考古学分野がCOE事業で推進してきた調査・研究を継続するものであり、縄文時代から古代までを対象に日本の基層文化形成に大きく関わってきた祭祀・儀礼をより明らかにすることが目的である。

考古学資料館では現在日本の旧石器時代から江戸時代まで、及び中国・朝鮮・東南アジア・南米など諸外国の考古遺物と民俗資料約一〇万点、神道資料館では約三〇〇〇点を所蔵しており、今後収集する資料を含めて、これらを有機的に展示して

研究・教育に資するとともに、学術資料館独自の講演会・講座を開設し

て、研究成果の普及に努めることが必要となる。

校史・学術資産研究センター

校史・学術資産研究センター助教 藤田大誠

近年、全国の各大学においては、「大学の個性化」という社会的要請を背景として、自校史に関する資料の収集・保存・管理・閲覧の体制を確立するとともに、自校史についての学術研究を行ってその成果を自校史教育に活用し、展示などによって広く社会に発信する役割を担う機関、いわゆる「大学アーカイヴズ」の活動が積極的に展開されている。

これは、自校史研究には、各大学の学問的及び社会的意義等を歴史から学ぶという機能が、本来的に備わっていることから齎される必然的な傾向であるといえよう。

國學院大學は、明治十五年十一月四日にその設立母体である皇典講究所が開費して以来、今年で創立百二十五周年を迎える全国でも有数の歴史を持つ私立大学である。本学ではその刻んできた年輪の大きさにふさわしく、これまで『皇典講究所五十年史』、『國學院大學八十五年史』、『國學院大學百年史』などの立派な「年史」を編纂してきたが、こと体系的な「大学アーカイヴズ」

活動に関しては、他大に比してやや立ち遅れて来たことは否めない。

無論、本学においても、大学事務局の一課である校史資料課(現・研究開発推進機構事務課校史資料担当)が、長年に亘り学内の校史関係資料を保存・管理し、展示や刊行物編纂に従事するなどの重要な役割を果たしてきたものの、これまで、本学に所属する教員や若手研究者が、この事務系統の組織と密接に連携して自校史を体系的・本格的に研究し、さらにその成果を本学の校史教育に結び付け、学外に発信する研究機関を有してはいなかった。

このような状況に鑑み、このたび、研究開発推進機構における共同利用研究機関の一つとして、國學院大學の歴史及び本学の有する学術資産の研究を行い、その成果を広く社会に還元することを目的とする、校史・学術資産研究センター(センター長 阪本是丸神道文化学部教授)が新設された。

本センターでは、①校史に関する研究、②本学所蔵の学術資産に関する研究、③資料の収集、整理及び展示、④

折口博士記念古代研究所並びに河野博士記念室及び武田博士記念室に関する資料の研究、⑤研究成果の公開及び本学の教育活動への支援、⑥その他、本センターの運営に必要な事業、を行うこととしており、これらの事業を遂行するため、現在(1)校史研究と(2)学術資産研究の二部門を置いている。

校史研究においては、体系的な研究・教育、公開活動は勿論のこと、関係資料の整理については、単なる事務的作業としてではなく、その成果が法人の申請業務等に活用されるものとする。とも視野に入れていく。また、学術資産研究では、各学術資産に関する研究はもとより、まずもって本学が所有する学術資産の把握・管理(1)での「管理」という表現は、「学術資産の価値を管理する」という意味である(2)や、研究体制の整備を行うことも重要な役割である。つまり、本学所蔵の学術資産を総合的に管理し、本学の研究者であれば、本学の学術資産を活用した研究を誰もが等しく行える体制とすることを大きな目的としている。なお、両部門は密接に関連するものであり、両者を統合する視点を持ちつつ、学外研究者との連携も考慮しながら研究企画を立案し、それを遂行していく必要がある。

ずれも平成十九年度で一定の成果を挙げて終了することとなっている。今後、これらの研究成果を本学の学術資産としていかに位置付けていくのかについても検討する余地が残されているように。

このように、本センターにおいては、「校史研究」と「学術資産研究」の二つの柱を立てていることが、他大学の大学図書館や大学史資料センターとは一味違う特質だといえる。これは、本学の校史を単に「学術史」という範疇でのみ捉えるのではなく、「皇典講究所・國學院大學の校史」は、そのまま総合的日本文化学ともいえる近世以来の「国学」の歴史上に位置付けられ、また、近代日本の人文学の歴史の重要な部分を構成しているという認識を持ちつつ、校史研究・教育がなされなければならないと考えているためである。

本学における学問は、まさに「国学の近代的展開」として推移してきたものであり、その建学の精神である「神道」に関する学問(神道学)を基盤として、山田顯義の「國學院設立趣意書」(明治二十三年七月)に表現されていた如く、広い意味における「国史・国文・国法」(国史学、考古学、国文学、国語学、民俗学、漢文学、宗教学、法制史学、経済学、等)をその中核としつつ、時代とともにその研究対象の範囲や方法を広げて発展してきたのである。

折りしも本年四月、文部科学省の平成十九年度私立大学学術研究高度化推

進事業(オープン・リサーチ・センター〔ORC〕整備事業)に、本学の申請事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」が選定された。これにより、研究開発推進機構を母体とする伝統文化リサーチセンターが主体となって、三つの研究プロジェクトを遂行することとなったが、そのうち、(3)「國學院の学術資産に見るモノと心」プロジェクト(研究グループ代表「青木周平文学部教授」)については、本センターが中核となって、主に近代の神道・国学を中心とする本学所蔵の学術資産を対象とした研究を行うものと位置付けられている。

このプロジェクトの目的は、皇典講究所・國學院大學が編纂・出版した刊行物や、その存在自体が本学の歴史を反映したものである本学所蔵の各種「レクシオン」(学術資産)に基づき、本学における伝統文化発信の実態と、そこで重要な意味を持つ「国学」の学問的手法を用い、近代以降の「モノ」と「心」に関する人文学の展開を明らかにすることにある。具体的には、皇典講究所・國學院大學が編纂・出版した刊行物のデータベース化・アーカイブ化を図り、体系的な公開・研究利用を可能とする体制を構築するとともに、出版物の「モノ」としての来歴、出版に至る経緯と背景などを明らかにすることで、皇典講究所・國學院が果たして来た社会的役割と近代の人文学系諸学問の展開を解明する。また、井上頼岡、宮地直一、

大場磐雄、河野省三、武田祐吉、折口信夫など本学縁りの碩学に関する特色あるレクシオンを対象として、資料の整理・目録化とその分析を行いながら、資料群の核となる人物とその周辺学問交流の実態に関する研究を行い、本学の学術資産やその研究成果をより効果的に公開できる体制を構築する。

とりわけ、来年度からは、これらデータベース・目録類を基盤として、上記資料を対象とした研究を本格的に進め、その成果を講演やシンポジウム、または様々な媒体で発信し、さらに学術メディアセンターのORC成果公開スペースにおいて展示していく。

本プロジェクトを通じて、近世から今日までの人文学系の学問史を総合化することが可能となり、また、大学院生や学部生を対象とした参加型・課題発見型の演習科目の設定など、具体的な校史教育の検討も計画されている。これにより、本学の校史・学術資産を通して人文学系の学問史に精通し、それを発展させることの出来る有為な若手研究者の育成が可能となってくるのである。

つまり、本センターでは本年度から五年間、主にORC事業を通して校史・学術資産研究の基盤を構築していくことになる。「安定飛行」に至るには未だ程遠く、課題も山積している現状ではあるが、何とか構成員の力を結集し、研究・教育に邁進する所存である。

研究開発推進センター

研究開発推進センター講師 加瀬直弥

学内における外部資金事業の立案推進を大きな目的に、センターが日本文化研究所の付属機関として発足したのは、平成十八(二〇〇六)年三月と最近のことである。もともとセンターの構成員は、平成十四年度採択・文部科学省二十一世紀COEプログラム・神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」の研究事務の遂行に当たってきたCOE事務局のメンバーが中心であった。COE事務局では、補助金がプログラムの趣旨に沿い、不正・不適正なく使用されているかどうか日々精査を行いつつ、文部科学省・日本学術振興会への申請書・調書・報告書等を作成するための準備からその原案の作成まで夙夜従事していた。このような営みの中で得られたノウハウを、COE事業終了後の大学の戦略的研究教育活動の策定・運用に活かすことが、機構の一組織となった現在もセンターの重要な使命であり、第一の任務である。

この任務は外部資金の獲得という、人文系の研究者を主体とする研究機関としてはいささか困難なハードルを乗り越える必要があった。昨今内

外から求められる「個性輝く大学」を目指すための研究教育活動を行うためには、その活動に対する高い評価と注目度、さらには資金が必要となるのは自明の理である。しかも、昨年度は補助金事業であるCOEプログラムの最終段階であり、その成果をどのように後進に伝えていくかという問題は最重要課題として認識していた。こうした点から、補助金の獲得に向けての申請作業は避けては通れない任務として、大学学部教育(特色GP)・大学院教育(大学院教育イニシアティブ)・大学院修了者等の育成(グローバルCOE)という、

本学のすべての教育課程において、文部科学省の補助金事業の採択を目指す教育プランを構築し、申請作業を行った。残念ながらこれらはいずれも不採択となったが、計画自体は、本学の建学の精神である神道の研究をどのように展開していくかという点に留意したものであり、建学の精神を具現化し、それを将来にわたって強固なものにするための『國學院大學二十一世紀研究教育計画』(平成十四年理事会策定)に即したものである。この特色ある建学精神に基づき、

かつ世界のどこにもない「国学」的研究教育手法によって、神道と神道に由来する日本文化の諸相の特色である「主体性を保持した寛容性と謙虚さ」を示し、世界に日本発の共生・協調策を提案することこそが、「個性輝く大学」を目指す上で本学の取るべき道であると考える。この目的は、センターにおける計画全てに一貫しており、今後同様であるため、なお事業の展開のため、外部資金の獲得を企図していきたい。

センターではこうした申請作業と同時に研究教育機関の再編案を策定し、建学の精神に基づく研究教育活動を行うための基盤作りを重点課題と位置づけた。本学の特色ある研究を推進するためには、確固たる組織のもとで遂行することが何よりも重要だからである。

もともと、『國學院大學二十一世紀研究教育計画』には、「日本文化の総合的研究と発信のための世界的研究教育センター」を構築することが重要な施策として位置付けられていた。このための事業がCOEプログラムそのものであったのだが、これを具体化するにあたりセンターは、「研究開発推進機構」の設置準備を行い、発足後の円滑な運営を目指したのである。現在も機構長直属の機関として、「本機構の予算、決算その他の運営に係わる事項等の企画立案及び実

施」することがセンターの事業であることが規程化されており、目下次年度以降の本格的展開のための様々な準備を行っている。

さらに、機構の発足と密接に関連した平成十九年度完成の新施設「学術メディアセンター(AMC)棟」の機能を最大限に生かした研究活動を行うための研究教育事業の計画策定にもセンターが中心に関わってきた。策定には一年近くかかったが、現在の学術資料館、校史・学術資産研究センターに所属する若手研究者等や大学事務局の全面的協力を得た結果、学内外四十人以上の研究者による開かれた伝統文化の研究教育プロジェクト「モノと心に見る伝統の知恵と実践」として完成を見た。これは文部科学省オープン・リサーチ・センター(ORC)事業に選定され、機構全体の研究の活性化に向けた契機を迎えることができた。センターとしては、今後も補助金の効率的な使用のためORC事務局を設置し、事業の推進の支援を行う予定である。最後に、センター独自の研究計画を紹介したい。センターでは、若手研究者の研究の促進を担うために、院友神職会をはじめ、神社界からの寄付金による若手育成策および研究計画を実施している。昨年度も山城国賀茂社を中心とする神社研究と、日本人の慰霊・追悼に関する学際的

研究を進めることができ、構成員の研究成果を『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』創刊号にまとめることができた。

本年度は二年計画で、若手研究者の創造力あふれる視点からの神道研

伝統文化リサーチセンター

伝統文化リサーチセンター長 杉山林 継

このたび新たに伝統文化リサーチセンターのセンター長に任命された。このセンターが目指すところを端的に言えば、いわば國學院流の「伝統文化」研究を世の中に示し、利用してもらうことである。

本学における伝統文化研究は、いわば本学の歴史といってもよいだろう。西洋文化礼賛の気運高まる明治初年の社会状況下で、敢えて日本の伝統文化を直視して、古典・旧礼に明るい人材を育成することを目指した本学は、ある意味で日本の教育制度における「異端児」であり続けていた。しかしながらその歩みは着実にあり、単に古典旧礼の「もの(かたち)」を学ぶのみならず、その背景にあるいしえ人の営みや心をもくみ取ってきた。つまり、単なる昔の事物を復元するのではなく、昔の人々が培ってきた「心(精神的豊かさ)」

究を進展させる予定である。昨今若手研究者の前途は極めて厳しい状況にあるが、今後は本学の建学の精神に基づく研究の確かな蓄積を礎に、意欲的に研鑽していきたい。

をも受け継ぎ、その特色を今に示すことを行ってきた。いわゆる稽古照今の精神である。この点、単なる事物考証や、軽薄なヒューマニズムに左右された俄仕立ての伝統文化研究とは一線を画すものである。

とりわけ、大学院と研究機関を持つ大学の、研究部門における足腰を強くするため、文部省(現・文部科学省)の行ってきた「私立大学学術研究高度化推進事業」の一つである学術フロンティア推進事業に本校の「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」が選定を受けた。この事業では、國學院大學における学術資産のデジタル化による保存と活用を図ると同時に、その成果をインターネット上に公開し、内外の研究に資するように心掛けてきた。これによって研究成果が地方史研究、各地の博物館活動、さらには教育現場

での利用等多岐に渡り、活用されてきた。

このフロンティア事業をはじめとした本学のこれまでの研究成果を踏まえ、研究活動のために収集された学術資産を活用した三つのプロジェクトによる、「モノと心に学ぶ知恵と実践」という研究事業が、ふたたび私立大学学術研究高度化事業の一環である文部科学省オープン・リサーチ・センター事業に選定された。伝統文化リサーチセンターはこの事業の推進を専ら推進することになる。

この事業は、(1)「祭祀遺跡に見るモノと心」(2)「神社祭祀に見るモノと心」(3)「國學院の学術資産に見るモノと心」、以上三つのプロジェクトからなる。以下概要を説明する。

(1) 祭祀遺跡に見るモノと心

(プロジェクト代表者・杉山)

この研究は、戦前から本学で連続と培われてきた神道考古学による研究業績を基盤として行うものであり、その対象として祭祀遺跡・遺物を対象とする。モノに反映された心を、最も鮮明に抽出することができるのは祭祀関係のモノの他にはない。本学祭祀遺跡・遺物研究は戦後においても数々の成果を上げ進展し、大場磐雄が「神道考古学」を提唱するなど、考古遺物から見る祭祀のありかたを追求した研究者が多く活躍した。この成果をさらに促進させるため、

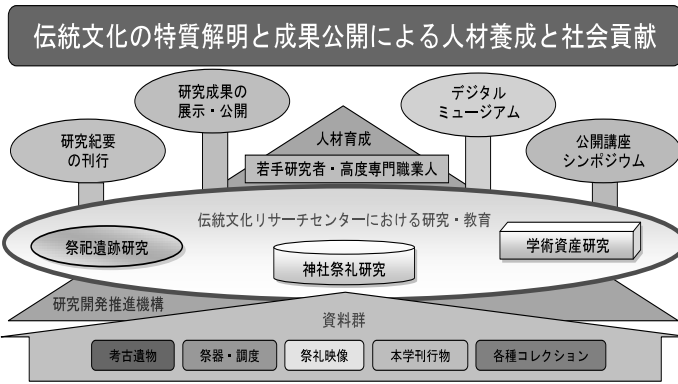
当該プロジェクトでは「クロス・コネクチュアル分析(CCA)」を取ることにした。これは学際的な分野から多角的に遺跡・遺物の実態を明らかにしようとする試みで、モノから捉えにくい日本人の精神構造を明確化するというのが一つの目標である。

いま一つ重点を置くのは、遺跡のランドスケープ研究(LSA)であり、該当する遺跡の周辺域との関係についても考察しようとするものである。この試みは本学の一線級の研究者が追究していたものであるが、CCAと同様根気のある実地調査等が必要となる。決して安易ではないが、この点についても追究することになる。

(2) 神社祭祀に見るモノと心

(プロジェクト代表者・茂木貞純教授)

神社で行われる祭祀は、日本の伝統文化を保持しつつ、異文化や他宗教の要素をも取り入れ、現在なお人々の生活に息づいているものと考えられる。本学の神道研究者はこの点を、神道の「主体性を保持した寛容性と謙虚さ」に由来するものとして研究を行っている。このプロジェクトでは、祭祀に係する「モノ(祭器具・社殿など)」を対象としてとり上げ、「伝統文化を貫く精神的支柱」と、変容を許容する日本文化の文化的寛容性を明らかにする。調査の起点として全国の神社などに所蔵され



ている文化的価値の高い資料の所在調査を行いつつ、祭礼そのものたどってきた歴史を明らかにすること、を当面の課題とする。

(3) 國學院の学術資産に見るモノと心 (プロジェクト代表者・青木周平教授)

國學院は、神道を建学の精神とする皇典講究所の教育機関として設立した。その国史・国文・国法教育は、近世以来の伝統的学問であり、精緻な実証と社会還元を旨とする国学を基盤としている。この国学がいかにか、皇典講究所等で刊行された刊行

物や、井上頼岡、河野省三、宮地直一、武田祐吉、折口信夫、大場磐雄等、本学の教員を務めた碩学泰斗の旧蔵資料群などの調査を行い、本学の学問を近代人文学の形成過程に位置づける。

これらの研究活動はいずれも研究者育成と職業人を養成するねらいを有している。本センターで行われる事業を基礎として、新しい形での研究の展開がなされることが可能となるよう、ポストドク研究員・リサーチアシスタントをはじめ、外部の客員教授や共同研究員とともに研究をすすめることとなっている。

また、オープン・リサーチ・センター事業では研究成果の公開も強く求められており、それは従来のフロンティア事業と異なる点である。すなわち、「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」事業の成果が、本学独自のそれとして国内外で高度なものと認められ、利用価値ありとされなければ事業を行う意味がないのである。一流の研究を推進するとともにいかに多くの研究者に活用してもらえるか、この点に留意して、研究成果を刊行物・公開講座などで発信するのみならず、現在建設中の学術メディアセンター(AMC)棟地下一階に設けられた一六〇〇平方メートル強の広さを有する研究成果展示スぺー

スにてその成果を展示することをも計画している。

研究の遂行は、学部や機構の他機関に所属する教員が中心となる。年を追うことに繁忙化する学務や、施設移動の準備を行いながらの研究活動は決して平坦なものではない。しかし、この五年間で國學院の学問の確固たる礎だけは着実に築いていかなければならない。自らもセンター長として全力を傾け、センターの運営を担う所存である。

平成19年度 研究開発推進機構人事一覧

機構長

阪本是丸

副機構長

井上順孝

教授(専任)

高塩 博

教授(兼任)

青木 豊、石井研士、井上順孝、大和博幸、岡田莊司、小川直之、小林達雄、阪本是丸、辰巳正明、千々和到、野村一夫、濱口 學、吉田恵二

准教授(専任)

内川隆志、柴田紳一

講師(兼任)

黒崎浩行、西岡和彦、ヘイヴンス・ノルマン

講師(専任)

松本久史、太田直之、加瀬直弥、加藤里美、平藤喜久子、

講師(特任)

中野裕三、中山 郁

助教

遠藤 潤、齊藤智朗、星野靖二

助教(特任)

新井大祐、藤田大誠、森 悟朗

客員研究員

池田直隆、市川 収、市田雅泰、大澤広嗣、城崎陽子、高見寛孝、長又高夫、堀越祐一、宮部香織

P.D研究員

星野光樹、宮本善士

研究補助員

イリザリ・ジョシユア、シッケタンツ・エリック、ジョリオン・トーマス、大東敬明、田中秀典、戸浪裕之、中村 聡、村瀬友洋、横山直正

客員教授

アルフォンソ・ファレロ、小林 宏、木野主計、島 善高、齋藤ミチ子、中山光勝、原田一明、牟禮 仁

共同研究員

江島尚俊、江頭慶宣、奥田恵瑞、奥田秀、川島孝一、菅野直樹、菅 浩一、宋戸忠男、住家正芳、瀬賀正博、武井順介、高橋勝浩、冨塚一彦、中澤伸弘、錦田剛志、メーガ・ジェームズ、橋村 修、藤井弘章、ビュテル・ジャン・ミシェル、ブルトンス・アルイ、山内利秋、山田美紀子、山添奈苗、樂 豊実、ワルド・ライアン

学術メディアセンター事務部長

橋本幸典

研究開発推進機構事務課長

堀内弘行

研究開発推進機構事務課担当課長

杉本久男

研究協力担当

山口輝幸、須田佳代、小林信久、田辺美代子

日本文化研究所担当

鍋島秋美、小平浩衣

校史資料担当

門平浩司、益井邦夫

考古学資料館担当

渡邊久美子

平成19年度
 伝統文化リサーチ
 センター人事一覧
 (文部科学省オーブン・
 リサーチ・センター選定
 事業「モノと心に見る伝
 統の知恵と実践」推進)

センター長

杉山林継

研究グループ代表

茂木貞純 青木周平

教授

小林達雄 吉田恵二、小川直之

青木 豊 沼部春友、岡田莊司

武田秀章、大和博幸、阪本是丸

准教授

谷口康浩 内川隆志、茂木 栄

西岡和彦

講師

加藤里美 太田直之、加瀬直弥

松本久史

助教

遠藤 潤 齊藤智朗、藤田大誠

客員研究員

中村 大 島田 潔、池谷浩一

客員教授

小林青樹 西本豊弘、ケイナー、

サイモン、樂 豊実、櫻井治男

牟禮 仁、藤澤 彰 益井邦夫

秋元信英 三宅守常

共同研究員

笹生 衛 佐々木雅裕 栗木 崇

藤本頼生 佐藤一伯 岸川雅範

PD研究員

加藤元康 田中大輔

リサーチアシスタント

新原佑典 齋藤しおり、大東敬明

田中秀典 戸浪裕之、中村耕作

渡邊 卓

(平成19年6月25日現在)

平成19年度研究開発推進機構 研究部門および事業計画一覧

平成19年6月25日現在

(*は責任担当者)

機関	プロジェクト名	専任教員	兼任教員	客員研究員	PD研究員	研究補助員	客員教授	共同研究員	
A	日本文化研究所	近世国学の靈魂観をめぐる思想と行動の研究	*松本久史 遠藤 潤						
		デジタル・ミュージアムの構築と展開	平藤喜久子 遠藤 潤 星野靖二	*井上順孝 石井研士 小川直之 千々和到 ハイヴズ・N 黒崎浩行	市川 収 市田雅崇 大澤広嗣 堀越祐一		シッケツツ・E イリザリ・J トーマス・J 村瀬友洋	牟禮 仁	江島尚俊、住家正芳 武井順介、ワルド・R メーガ・J、山内利秋 山田美紀子
		日本神話の神話学的研究	*平藤喜久子						ビュテル・J・M、プロトンス・A
		万葉集における神事語彙の基礎的研究		*辰巳正明					
		現代日本の情報環境における健康とメディア文化		*野村一夫					
	「詩人大使」ポール・クロードルの総合的研究 「国際文化交流」と日仏関係史							*濱口 學	
B	考古学 資料館 神道資料館		内川隆志	*吉田恵二 小林達雄 青木 豊					
		雑穀文化と日本の基層信仰	*加藤里美 加瀬直弥	*岡田莊司					樂 豊実
			藤田大誠	*阪本是丸					
C	校史・学術資産研究センター	「栢陰文庫」を中心とする学術財産の構築と運用	*高塩 博 柴田紳一 齊藤智朗	大和博幸	池田直隆 城崎陽子 高見真高 長又高香 宮部 織		原田一明 島 善高 木野主計	奥田恵瑞、奥田 秀	
		カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立 地域総合調査を通じて	*松本久史 加藤里美 齊藤智朗	西岡和彦			田中秀典	齋藤ミチ子	江頭慶宣、中澤伸弘 宍戸忠男、橋村 修 藤井弘章、錦田剛志 山添奈苗
		日本近代政治史の諸問題 井上毅の遺産と負債	*柴田紳一						菅野直樹、高橋勝浩 冨塚一彦
		幕藩刑法とその刑罰の研究	*高塩 博					小林 宏 ファレロ・A 中山光勝	瀬賀正博
		「律令研究会」の運営	*高塩 博						川島孝一 菅 浩二
D	研究開発推進センター		太田直之 加瀬直弥 中野裕三 中山 郁 新井大祐 森 悟朗	*阪本是丸		星野光樹 宮本 誉士	中村 聡 戸浪裕之 大東敬明 横山直正		
E	刊 行 プロジェクト	『近世学問を検証する』の刊行	*加藤里美						
		『井上毅伝』史料篇補遺第二の刊行	*高塩 博						
		『佐佐木文庫目録(仮称)』の刊行	*高塩 博				リサーチアシスタント		
*	伝統文化リサーチセンター	祭祀遺跡に見るモノと心	内川隆志 加藤里美	*杉山林継 小林達雄 吉田恵二 小川直之 青木 豊 谷口康浩	中村 大	加藤元康 田中大輔	新原佑典	小林青樹 西本豊弘 ケイナー・S 樂 豊実	笹生 衛、佐々木雅裕 栗木 崇
		神社祭祀に見るモノと心	太田直之 加瀬直弥	*茂木貞純 沼部春友 茂木 栄 西岡和彦 岡田莊司	島田 潔 池谷浩一			櫻井治男 牟禮 仁 藤澤 彰	藤本頼生、佐藤一伯 岸川雅範
		國學院の学術資産に見るモノと心	松本久史 遠藤 潤 齊藤智朗 藤田大誠	*青木周平 武田秀章 大和博幸 阪本是丸			齋藤しおり 大東敬明 田中秀典 戸浪裕之 中村耕作 渡邊 卓	益井邦夫 秋元信英 三宅守常	



会議

全体

第一回企画委員会、四月三日(火)十三時~十五時、日本文化研究所プロジェクトルーム

全員連絡会、四月六日(金)十六時~十七時二十分、若木タワー〇二会議室

第二回企画委員会、四月二十五日(水)十一時~十二時三十分、日本文化研究所プロジェクトルーム

第三回企画委員会、五月三十日(水)十一時~十二時、日本文化研究所プロジェクトルーム

日本文化研究所

第一回デジタル・ミュージアム企画会議、四月十一日(水)十四時~十六時、日本文化研究所プロジェクトルーム

第二回所員会議、四月十八日(水)十六時~十七時三十分、日本文化研究所プロジェクトルーム

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」学術フロンティア関係会議、四月二十七日(金)十四時~十六時、日本文化研究所プロジェクトルーム

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」学術フロンティア関係会議、五月二十二日(火)十時三十分~十二時、日本文化研究所プロジェクトルーム

第二回デジタル・ミュージアム企画会議、五月二十三日(水)十四時~十五時三十分、日本文化研究所プロジェクトルーム

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト会議、五月二十四日(木)十四時~十六時、日本文化研究所プロジェクトルーム

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト会議、五月二十四日(木)十四時~十六時、日本文化研究所プロジェクトルーム

学術資料館

第一回学術資料館会議、四月二十五日(水)十六時~十七時三十分、若木タワー〇五会議室

学術資料館考古学展示策定会議、五月十四日(月)十六時~十八時、一一一八研究室

学術資料館考古学展示策定会議、五月二十一日(月)十四時~十六時、考古学資料館学術資料館考古学展示策定会議、五月二十八日(月)十四時~十六時、考古学資料館

校史・学術資産研究センター

「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクト文献班会議、四月十六日(月)十五時~十六時、日本文化研究所プロジェクトルーム

「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクト考古班会議、五月七日(月)十七時~十八時、日本文化研究所第四研究室

第一回センター会議、四月十七日(火)十四時三十分~十六時、COEプログラム事務局会議スペース(若木タワー八階)

「梧陰文庫」を中心とする学術財産の構築と運用」プロジェクト会議、四月二十四日(火)十五時~十六時、日本文化研究所第五研究室

「梧陰文庫」を中心とする学術財産の構築と運用」プロジェクト会議、五月二十九日(火)十五時~十六時、日本文化研究所プロジェクトルーム

「梧陰文庫」を中心とする学術財産の構築と運用」プロジェクト会議、五月二十九日(火)十五時~十六時、日本文化研究所プロジェクトルーム

「梧陰文庫」を中心とする学術財産の構築と運用」プロジェクト会議、五月二十九日(火)十五時~十六時、日本文化研究所プロジェクトルーム

「梧陰文庫」を中心とする学術財産の構築と運用」プロジェクト会議、五月二十九日(火)十五時~十六時、日本文化研究所プロジェクトルーム

出版

平成十八年度

茂木 栄、「祭祀から見た社の文化史的意味の研究」プロジェクトによる調査のため、島根県松江市鹿島町佐太神社、九月二十四日(日)~二十六日(火)

加藤里美、共同プロジェクト「岩化画像の再生活用と保存に関する基礎的研究」の調査のため、千葉県市川市行徳、三月十日(土)

松本久史、「神道と国学の歴史に関する資料的研究」プロジェクトによる調査のため、鹿児島県歴史資料センター黎明館・鹿児島県立図書館、三月十五日(木)~十八日(日)

粕谷 崇、「鏡に関する神道考古学からの研究」プロジェクトによる調査のため、京都府埋蔵文化財調査研究センター、三月十六日(金)~十八日(日)

篠原祐一、「鏡に関する神道考古学からの研究」プロジェクトによる調査のため、京都府埋蔵文化財調査研究センター、三月十六日(金)~十八日(日)

平藤喜久子、「日本神話の神話学的研究」プロジェクトによる調査のため、国際日本文化研究センター、三月十八日(日)~二十日(火)

井上順孝、「神道・日本文化のオンライン情報発信の総合研究」プロジェクトによる調査のため、成均館大学校・韓国国立中央博物館、三月二十日(火)~二十四日(土)

堀越祐一、「起請文料紙としての牛玉宝印の研究」プロジェクトによる調査のため、長浜城歴史博物館・京都府立総合資料館・和歌山県立博物館、三月二十二日(木)~二十四日(土)

高塩 博、「江戸時代徒刑制度の研究」プロジェクトによる調査のため、福岡県立図書館・中津市立小幡記念図書館、三月二十三日(金)~二十六日(月)

加藤里美、巨石文化に関する遺跡調査・サドルカーンとロータリーミルの利用法と粉食に関する調査のため、Salisbury Museum・Stonehenge・Museum of London、三月二十三日(金)~二十九日(木)

三浦圭介、「古代辺境文化の研究」プロジェクトによる研究発表のため、國學院大學、三月二十四日(土)~二十五日(日)

杉山林継、「神道と国学の歴史に関する資料的研究」プロジェクトによる調査のため、美保神社、島根県立古代出雲歴史

博物館、三月二十八日(水)~三十日(金)

堀越祐一、「起請文料紙としての牛玉宝印の研究」プロジェクトによる調査のため、盛岡中央公民館・仙台市立博物館・零羊崎神社、三月二十八日(水)~三十一日(土)

星野光樹、「近世近代の神道・国学に関する基礎資料の収集と分析」プロジェクトによる調査のため、大阪市立大学学術情報総合センター、三月二十九日(木)~三十一日(土)

高塩 博、「幕藩刑法とその刑罰の研究」プロジェクトによる調査のため、京都大学付属図書館・京都府立総合資料館・大阪市立大学学術情報総合センター、四月十九日(木)~二十日(土)

松本久史、「創立百二十周年事業」新編荷田春満全集の刊行」プロジェクトによる調査のため、東丸神社、四月二十九日(日)~五月三日(木)

平成十九年度

高塩 博、「幕藩刑法とその刑罰の研究」プロジェクトによる調査のため、京都大学付属図書館・京都府立総合資料館・大阪市立大学学術情報総合センター、四月十九日(木)~二十日(土)

松本久史、「創立百二十周年事業」新編荷田春満全集の刊行」プロジェクトによる調査のため、東丸神社、四月二十九日(日)~五月三日(木)

岡田莊司、学術資料館・展示用模型(大神社関係祭祀遺跡)制作のための原資料調査のため、大神神社・奈良国立博物館・奈良県立権原考古学研究所、五月十七日(木)~十八日(金)

内川隆志、学術資料館・展示用模型(大神社関係祭祀遺跡)制作のための原資料調査のため、大神神社・奈良国立博物館・奈良県立権原考古学研究所、五月十七日(木)~十八日(金)

加藤里美、学術資料館・展示用模型(大神社関係祭祀遺跡)制作のための原資料調査のため、大神神社・奈良国立博物館・奈良県立権原考古学研究所、五月十七日(木)~十九日(土)

加藤直弥、学術資料館・展示用模型(大神社関係祭祀遺跡)制作のための原資料調査・展示に関する研究動向及びその根拠となる資料の把握のため、大神神社・奈良国立博物館・奈良県立権原考古学研究所、五月十七日(木)~二十日(日)

加藤直弥、学術資料館・展示用模型(大神社関係祭祀遺跡)制作のための原資料調査・展示に関する研究動向及びその根拠となる資料の把握のため、大神神社・奈良国立博物館・奈良県立権原考古学研究所、五月十七日(木)~二十日(日)

加藤直弥、学術資料館・展示用模型(大神社関係祭祀遺跡)制作のための原資料調査・展示に関する研究動向及びその根拠となる資料の把握のため、大神神社・奈良国立博物館・奈良県立権原考古学研究所、五月十七日(木)~二十日(日)

加藤直弥、学術資料館・展示用模型(大神社関係祭祀遺跡)制作のための原資料調査・展示に関する研究動向及びその根拠となる資料の把握のため、大神神社・奈良国立博物館・奈良県立権原考古学研究所、五月十七日(木)~二十日(日)

加藤直弥、学術資料館・展示用模型(大神社関係祭祀遺跡)制作のための原資料調査・展示に関する研究動向及びその根拠となる資料の把握のため、大神神社・奈良国立博物館・奈良県立権原考古学研究所、五月十七日(木)~二十日(日)

加藤直弥、学術資料館・展示用模型(大神社関係祭祀遺跡)制作のための原資料調査・展示に関する研究動向及びその根拠となる資料の把握のため、大神神社・奈良国立博物館・奈良県立権原考古学研究所、五月十七日(木)~二十日(日)